

『エーレンガート』にみられる Karen Blixen の芸術家像

—芸術家は誘惑者か否か—

要約

デンマーク語 今城千慧莉

本論文は『エーレンガート』を詳細に分析し、作中で描かれる「誘惑」と Karen Blixen の芸術観との関係を頭かにしたものである。また、芸術家カゾッテ氏が誘惑者である、という作中の構図にも触れ、物語の結末と照らし合わせて分析し Karen Blixen の芸術家像についても考察した。

第1章においては筆者がこのテーマを選択した理由とテーマについての簡単な説明を行い、第2章では作者 Karen Blixen についての紹介を行った。本論文第3章からは『エーレンガート』について、作品の情報やあらすじ、物語の構成などを紹介した。またここでは先行研究と Søren Kierkegaard の『誘惑者の日記』についても触れている。第4章では物語の中心である侍女エーレンガートと芸術家カゾッテ氏について、作中の台詞や生い立ち、行動などから詳細に考察を行った。第5章では本論文の研究の中心となる「カゾッテ氏の誘惑とその結果」と「誘惑者の逆転」について考察した。この二つの事柄は物語の転換点である第2部の「沐浴するエーレンガートをカゾッテ氏が垣間見る場面」と第3部の「赤ん坊誘拐事件」と深く関連していると考えた。そのためそれぞれの考察は物語の進行に沿って行った。また作中にみられる「中心／周縁」「見る／見られる」といった二項対立的枠組みにも言及し「誘惑者／被誘惑者」の関係について分析を行った。最終第6章では以上の考察と分析から、「誘惑者の逆転」はカゾッテ氏が芸術家であったからこそ起こったということ結論として導き出した。さらに「中心／周縁」の二項対立的枠組みの観点から考察したところ、もう一つの結論に至った。これらの関係は「中心」が一方向的に「周縁」を「客体化し見られる化」するように考えがちだが、実際はその逆もあり、常に相互的で交換可能である。エーレンガートが「周縁」の人物であることも、「中心」のカゾッテ氏との立場を逆転する要因となったと考えられる。また、この「誘惑者の逆転」という事象には Karen Blixen 作品の特徴の一つである「運命」が存在すると推測した。そしてこれこそが Karen Blixen の芸術観の一端であると考えられる。以上から、芸術家を演じた彼女の芸術観は、「運命」と切り離せないものであると結論づけることができた。